

← 隨 筆 →

# 消 夏

大 友 一 夫\*

富士山は、夏になると姿を隠す。それは暑くて白衣を脱いで、素裸になったところを近親者以外に見せたくないためである。ちゃんと、夏の湿度がカーテンの役割を果たしている。

富士山でさえそうであるから、夏の暑気や湿気が生物に及ぼす影響は、計り知れないものがある。とりわけ、ある種の病態にとっては、嫌な季節の到来である。しかし漢方には、それらに対処し得る処方がある。清暑益気湯の原方たる生脈散（麦門冬、五味子、人参）や、消暑丸（半夏、茯苓、甘草）等は、名の示す通りであるが、麦門冬の潤性や、半夏の温性のみ捉われている限り、この処方の意味をつかむのは難しい。

今回は、夏に影響を受けると思われるいくつかの疾患について論じてみたいと思う。暑湿の邪を直接受けるのは、足が火照るような変形性膝関節症や、糖尿病性腎症、暑がりの心不全、腹水を伴う肝硬変等である。

浮腫や腹水が出現し始めた肝硬変では、片方で水の余りがありながら、循環血漿量の低下に基く脱水症状が併存する。洋薬の利尿剤であるフロセמיד等は、もともと熱薬の要素を持っており、腎のみから利尿を計ろうとするならば、火に油を注ぐことになる。肝性昏睡や、吐血を誘発する所以である。昔、和田東郭が、水腫に巴豆等の逐水薬を使用し、失敗して一年間、水腫の治療を放

擲したこともむべなるかなである。原南陽が鼓脹には薬を使わず、捨て置くのも一策としたのは、腹水が防火用水の役割を果たしていることを知っていたためかもしれない。従って、肝硬変腹水の治療には、補中治湿湯や補気建中湯のような柔かな処方を使うことが無難であるが、これらの薬に、麦門冬や人参が入っていることは一考に値する。以前、大塚敬節先生が、浮腫を伴う患者に大柴胡湯に麦門冬を加味したのを目撃したが、後になっていささか感心したものである。私達の東静漢方研究会では、それらに駆瘀血剤と六味丸を併用することが多い。

ある肝硬変の患者は、合計四回の吐血を来したが、内一回は、他科で利尿剤を使い、尿も出尽した頃に発現し、一回は、六味丸を切ってまもなく発来した。ある患者は、はばたき振戦を伴う前昏睡状態で入院したが、補中治湿湯加味方を服用させ、まもなく、時は冬でもあり、足も冷えるというので、八味丸を合方したところ、全身状態や浮腫も改善した。しかし、尿も出尽した頃に、はばたき振戦と共に、意識障害が出現した。これは、桂枝や附子で体を焼きつけたためであり、六味丸に

\* おおとも・かずお。医師、大友医院。埼玉県秩父市上町2丁目10-9、☎368。

変方すると同時に治った。このように、肝硬変患者は既に虚熱を内在している。その上外界の暑気を受けると、体は炎上する。

ある年の8月13日、肝硬変の患者が吐血した。翌年の8月12日、別の肝硬変の患者が吐血して運ばれてきた。水屋の主で、腹水を伴った患者は、退院前日に窓際ベッドが空いたので、そこに移ったところ、退院日、前昏睡状態を来たしてしまった。肝硬変患者には日陰が必要である。この患者はその後、六味丸に麦門冬と五味子を加えた処方（八仙長寿丸）のみでコントロールしていたが、今では仕事もボチボチやっているという。

この麦門冬と五味子に人参を加えたのが、生脈散である。暑さは気を破る。これに陳皮と炙甘草を加えたのを補気丸と名付け、その延長上に清暑益気湯がある。呼吸機能が衰えて少気しているような患者も夏には弱い。

74才の老人は、咳嗽と食欲不振で、ある年の6月13日に来院した。23才の時、肺炎カタル、62才で心筋硬塞、71才の時、某大学病院でじん肺症の診断を受けている。受診前年の12月に風邪を引き、以後治療を受けているにも係わらず、夏に入ってめっきり体力が衰えた。体は極度に羸瘦し、皮膚は乾燥し、脈は浮数弱である。舌は赤く、苔は無いが湿っている。生ツバがでる。盗汗及び四肢冷感があり、夜間尿は4回ある。聴診にて笛声及び湿性う音を聴取し、胸部写真では、肺気腫を伴ったじん肺症である。呼吸機能では、著明な拘束性換気障害を認める。白血球は13,800、CRP 5 ⊕、RA 2 ⊕と炎症所見もある。この患者に生脈散料を3日分投与したところ、咳嗽は大幅軽減し、更に1週間服用で食欲もでてきた。

更に2週間服用で、咳嗽は時に出現する程度となった。この時の白血球は6,200、RA ⊕、CRP ⊖と改善した。

このように、呼吸器疾患のみならず、夏になると、生脈散加味方が行く症例が多くなる。味麦益気湯、清熱補気湯、扶脾生脈散、麦門冬飲子、知母茯苓湯、加味四物湯等、個々の病態に合わせて処方してゆけばよい。

舌が潤って、生ツバが出るならば、まだ津液の余りもあろうというものの、夏になると解熱剤の誤治によって、全身火達磨のような患者が舞い込んでくることがある。29才の男性は、ある年の8月20日午後4時頃、発熱、四肢痛出現し、近医で解熱剤の注射及び内服薬を受けるも、却って全身状態悪化し、7時に救急車で運び込まれた。この時、四肢強痛し、右上肢が動かないので、これを早く何とかしてくれと患者は哀願した。発汗著明にて、腹痛、頭痛共に強く、体熱感を訴える。これは解熱剤による脱汗のためと判断し、補液を行うと同時に、腹膜炎も考慮し、この時1回だけ抗生物質も混注した。これで四肢拘急、腹痛は治ったが、翌日は39°Cに熱発し、本来の病態である咽喉痛が増強した。白血球16,500、CRP 4 ⊕の単純な咽喉炎であった。清咽利膈湯を投与すると、翌日には36°C台に解熱し、1週間を経ずに退院していった。その後まもなくして、解熱剤と抗生物質の投与を受け、殆ど同じ症状が出現して入院した咽喉炎の女性患者がいたが、やはり同じ処方でも治癒している。いわば、ホースで水を浴びせるような処方である。

緑陰や、川面を渡る涼風、そして夕立など、夏になるとそれでも肌(はだ)にありがたい風物がある。